



東京全労協

2013年9月22日 58
東京都港区新橋6-7-1
川口ビル6F
TEL. 03 - 5403 - 1650
FAX. 03 - 5403 - 1653
発行人 瀧藤 朗
定価 1部 10円

東京全労協 学習交流会開催

松代大本営・無言館を訪ねて

全ては天皇を守る
ために準備された

松代大本営・無言館を
訪ねて

9月7日、8日に東京全労協は、長野県にある松代大本営と無言館を訪ねる「東京全労協学習交流会」を参加者40名で行った。

天皇制・国体護持のために建設された地下壕。最初に訪れた所は、「もうひとつの歴史館・松代」だ。ここでは、これから行く松代大本営の説明と「慰安所」についての説明が行われ、パネルや当時を感しさせる物品の展示があった。



アジア・太平洋戦争の末期、1945年5月現在の長野市松代町の象山・鶴舞山・皆神山を中心に、本土決戦の指揮所として大本営と天皇を移し、放送局なども移動させるための地下壕建設の計画が立てられた。為政者が戦地ばかりではなく、ここにも半強制的に借り上げられた民家に朝鮮人の女性が数名連れて来られ、「慰安所」を作ったという事実や当時の作業場の実態を知り深く考えさせられた。

この工事を運輸通信省から請け負った西松組、鹿島組が、約6千人とも言われる朝鮮人の労働者（朝鮮半島から強制連行されてきた人たちがもいた）この上に君臨する作業場の親方たちを競い合わせ、地元の子供達も含む戦時徴用・動員された人々（一日約2千人）を使って、およそ9ヶ月で全長10kmキロ口にも及ぶ地下壕建設の突貫工事を行わせた。

朝鮮人労働者たちは、三角屋根の風や雪が吹き込む粗末な建物に寝泊りし、コウリヤン飯とわずかなおかずという劣悪な労働条件の中で重労働を荷わされたのである。

続いて、象山地下壕と現在は松代地震観測所になっている「天皇の御座所跡」を探索した。

象山地下壕は、地下壕と



いうより山の中に碁盤の目のように張り巡らされたトンネルである。この一部の中に入った。ここでの工事は1944年11月11日に開始された。幅約四メートル、高さ約2.7メートルのこのトンネルは、削岩機で穴をあけ、そこにダイナマイトを詰め発破させ、あとは手作業による掘削により行われた。この場所の地盤は固く、一回の発破で掘られたのはわずかに二メートルだという。削り取られた岩をトロッコとモッコで運び出す作業も人海戦術で行われた。ここで労働者達は一日10時間、全てが一步待ちがえれば命を失いかねない危険な作業を行った。ここにいた大勢の朝鮮人労働者のことを考えると胸が締め付けられるようだ。

「天皇の御座所」は、鶴舞山に作られた。1945年3月23日工事の発令が行われ、4月3日に建設現場付近に住んでいた人たちに一週間以内、遅くとも4

月中に移転するように」という命令が出され、強制立ち退きが行われた。立ち退かされた民家は、改造された「仮御所」や「大本営」の将校たちの宿舎や食堂になった。

ここで伺った話の中で特に印象に残っているのは、この「天皇の御座所」建設と沖繩戦との関係だ。45年3月20日大本営は当面の作戦大綱「沖繩での作戦に重点を置く」を発表した。

3月23日から米軍による砲弾が始まり、鉄の暴風雨と言われた苛烈な沖繩戦が本土防衛の最前線として行われた。この同じ頃、「天皇の御座所」建設が行われている。

そして、御座所建設がほぼ完成した6月16日阿南陸軍大臣が松代に視察に来ている。そして、阿南は陸軍参謀総長と連盟で6月21日沖繩の牛島司令官に対して「貴軍の忠誠により本土決戦の準備は完了した」旨の電報を送っている。

6月23日牛島司令官は自決し、公式上沖繩作戦が終わった。「本土防衛」「本土決戦準備」とは、実は天皇の避難場所を作ることだったのでないか、このために沖繩の人々は犠牲になり、松代の朝鮮人労働者を初めとした人々は苦難を強いられたということだ。全ては、天皇制国家・国体を守るために行われていたという史実を知り、改めて強い怒りを感じた。

無言館
学徒兵たちの絵画が語りかけるもの

翌日は、「無言館」へ行った。ここは、徴兵された学徒の絵画が展示してある。どの絵も戦場とはかけ離れた平和の静けさを感じた。しかし、描いている人の心は戦地に赴かざるを得ない中で様々な思いが秘められている。

ふる里、妻や妹、そして恋人の絵など、どれも描くことで一体になり、脳裏に刻みこもつとされているように感じた。「無言」の絵が語りかける言葉が、絵と共に添えられている作者の短い人生の紹介とともに伝わってくる。

東京全労協は、毎年こうしたフィールドワークをおこなっている。

歴史を見つめ、現実を知り、多くの人々と出会うこの企画を是非今後も続けていきたいとの思いを強くした二日間だった。

南部全労協・藤村妙子

核なき社会実現を 原水禁福島大会に参加して

原水禁世界大会が7月28日、3年連続で福島市からスタートしました。

福島大会は、「核も戦争もない平和な21世紀に!」「くり返すな原発震災」「めざそう!脱原発社会」をスローガンに福島市教育会館で開催されました。

東京全労協からは、15名(練馬全労協10名含む)が結集し、全国各地から参加した1200人の仲間と共に集会・デモ行進を貫徹しました。

東日本大震災と広島、長崎の原爆の犠牲者に全員で黙とうをささげた後、川野浩一原水禁議長より「2度と悲惨な原発事故が起きないように全ての原発停止を求め」と挨拶を受け、五十嵐史郎福島県平和フォーラム代表は「原発事故がいかに過酷で無残なものか訴え続けたい」と強調されました。

大会の基調を藤本泰成大

7・28宣伝行動

全労協・脱原発プロジェクトによる宣伝行動に東京全労協も全力で参加しました。
当日は連日30度を超える暑さの中でしたが、宣伝カーによる訴えとチラシ配布、署名活動を行いました。



身近なところで伝えたい」と発言され、強く感動しました。

大会は最後に「事故の風化に抗し、原発の再稼働を阻止し、政府に脱原発・エネルギー政策転換に向けて舵を切らせることを決意する」との大会アピールを採択し、福島市内中心部まで、

講演を行った福島県内で生まれ育った、東京大学教授の高橋哲哉さんは、「今、福島を脱原発社会、核廃絶の希望を発信する場にしなければならぬ」とした上で、これ以上「国策による犠牲は許されない」と訴えました。

核兵器廃絶をめざすヒロシマの会共同代表の森滝春子さんは、事故後も原発再稼働に意欲を見せる国を批判。「核の商業利用も軍事利用も根は一つだ」と訴えました。

昨年、核兵器廃絶を国連で訴える「高校生平和大使」に選ばれた南相馬市出身の高野枝さんは「被災地のニュースが減り、風化が怖い。普通の生活が送れない現実を

郵政産業ユニオン 東京地本 第2回 定期大会を開催

郵政産業ユニオン東京地本は7月27日、第2回定期大会を開催しました。大会の冒頭あいさつで鶴島地本委員長は昨年の組織統合からの1年を振り返り、それぞれの組織の特徴と経験が生かされ、大きな成果が生



地域で、大衆的な活動を盛り上げ、草の根から政治を変え、政策を変える取組みを広めることが重要であると強く感じました。

中部全労協の 取り組み

中部全労協は
国鉄闘争・稚内



連帯する夕べに結集したJAL争議団

闘争団が築いてきた地域共闘の結集軸である「連帯する夕べ」を継承して、昨年引き続き「第35回連帯する夕べ」を9月20日に開催しました。

主催は「第35回連帯する夕べ」実行委員会とし、共催は中部全労協、事業体ネット稚内、賛同・干代田区労協、中央区労協、中央区職労、JAL不当解雇撤回裁判原告団、NTT木下支援共闘会議、

全労協女性委員会などが参加しました。

実行委員会は、数度の実行委員会を開催し、当日は午後から調理室で和気あいあいと料理を作りました。参加総数は100名以上ありました。

この「連帯する夕べ」を闘いの交流の場になればと思います。結集していただきましたご参加の皆さん、有り難うございました。

大会では第2期活動方針を採択し、新執行部を選出し、2013年度の活動をスタートさせました。

来賓として昨年の統一大会に続いて、瀧野朗東京全労協議長が出席し、激励と連帯のあいさつを行いました。また、東京地評からは寺下事務局次長が出席しました。

郵政産業ユニオン

中村知明

「フジビ闘争勝利！9・20決起集会」 解決を目指し闘い強化を確認！

昨年9月14日の偽装倒産・全員解雇と闘う「フジビ闘争」は闘争開始から1年が過ぎた。9月20日、富士美術印刷の地元荒川区民会館にて「フジビ闘争勝利！決起集会」が開催され、支援の仲間たち約150名が駆けつけ、解雇された組合員たちを激励し、闘争勝利を誓う1周年決起集会を成功させた。

決起集会は、東京労組大森委員長の主催者挨拶につづき、東京全労協久保事務局長が連帯の挨拶を行い、フジビ闘争の闘いの意義を確認し、東京全労協は勝利をめざして全力を尽くす決意を述べられた。



闘う仲間が結集し、闘争勝利をめざしこぶしを固めた

いのちとくらしを守る 第27回 10・27団結まつり開催

今年で27回目を数える団結まつりは「いのちとくらしを守る」ことをテーマに取り組みられます。

東京全労協は昨年と同様にテントを出店し、焼きソバを取り組むことを先の東京全労協常任幹事会で確認しました。

昨年と同様に東京全労協傘下の組合員との交流の場としていきたいと考えています。積極的なご参加を呼びかけます。

とき 10月27日(日) 10時～15時
ところ 東京・亀戸中央公園A地区